

Ai研 NewsLetter No.6

相澤病院臨床研修センターニュース

2011年1月11日

挨拶と共感

近頃当院では、研修医の挨拶がよく出来ないということが話題になっています。患者、コメディカル、同僚医師、先輩等々に対してということですが、では他職種の人々が出来ているかというと、正直に言って必ずしもそうとは言えないでしょう。特に医師には無愛想な者が時々見られ、残念なことである。そもそも挨拶は、昔から身分・職種にかかわらず行われてきた社会的習慣である。ただ、研修医の無作法が特に目立つのは、研修医が病院にとって比較的新顔であること、将来の医療を担ってほしい人材に対する期待、研修中なのでまだ習慣付けられる、患者等周囲の目が厳しいなどの理由からであろう。

そもそも学生時代ならば看過されていたことが、社会人となった途端に周囲の目が厳しくなるのは何故であろうか。おそらく、給与をもらい、プロフェッショナルとしての役割を期待され、医療費を払い信頼して医療を受けたい患者の期待などへの裏返しであろう。その意味では、挨拶が不十分なのは臨床研修センター・指導医等が中心となって行う教育に責任があるのかもしれない。しかし、社会一般の習慣としての挨拶の励行は、元をただせば個々の家庭教育に起因することが大であろう。

私事になるが、我が家についていえば、恥ずかしながら十分に挨拶教育をしたかとなると疑問である。家内に言わせると一番の問題は亭主(私)であったという。まともな時間に家に帰られない不規則な医師生活のなかで、不十分な挨拶の履行(私の両親の責任でもあろうが)は新婚時代の家内を悲しませたかもしれない。複数の子供ができると、家内の躰の標的はそちらの方に向いてしまい、何とか無愛想な私でも非難されずに済んできた。

さて、子供達がそれぞれ巣立ち、夫婦だけの Empty nest となってあらためて挨拶のなさが顕在化して、感情的軋轢の一因ともなってきた。そこで、話し合いの結果、この正月からは朝夕の挨拶、帰宅の挨拶、食事の挨拶を欠かさないことを約束してしまい励行し始めている。始めは二人のままごとの様な感じでしたが、除々に慣れていくであろう。

以前より私は、辞書無しには「挨拶」の字が書けなくて困っている。二文字のうちどちらが先か覚えられないのである。各々の字の意味が分かれば覚え易いが、辞書によると「挨」も「拶」も同じような「押す」という意味らしい。禅問答に起因していると言うから仕方が無いであ

ろうが、こじつければ「押して」「押し返す」ととれば、なんとなく「あいさつ」の意味になるかも知れない。

さて、社会的慣例からいえば、挨拶する場合、「言いかける言葉」と「返答の言葉」は調和がとれていなければならない。「おはよう」に対して「おそよう(もう昼に近いよ)」などとはいわないし、「寒いですね」に対して「私は寒くないよ」「冬だから当たり前さ」などとは言わない。挨拶を言い掛かり、あるいは議論にしてはならないのである。お互いにその後の本業が気持ちよくできる為の儀式・儀礼とするべきなのである。西洋では、どんなに気候が悪くてもお互いに「Good morning」と言っている。

これは、一種の「共感」、「交感」の心理現象で、人体においても自律神経が人体の恒常性(Homeostasis)の維持に重要な役割を果たしているのに似ている。ともに英語では Sympathy で表現されるが、例えば美しいものをみて「美しい」と他人がいった時に自分が同じ本当に「美しい」と感じるかは別として、「共感する能力(ability)」を持つことが大切であり、個体でも社会でもこの共感によって調和(Harmony)がとれているのである。

人体の自律神経は歴史的にはもともと、交感神経(sympathetic nerve)の表現しかなかった¹⁾。それが副交感神経(Parasympathetic nerve)の概念ができ実態が発見された。副交感神経はあくまでも「副 Para-」であって、反対の意味の「非 Dys-」を使う非交感神経(Dyssympathetic nerve)ではないのである。「副 Para-」あくまでも交感神経を補助する為の機構であることを意味しており、共同して固体の恒常性(Homeostasis)を保つ為に備わった機構であろう。

この機構を人間社会に当てはめるのは無理があるかも知れないが、挨拶とは、社会がスムーズに運用されるための共感機構かも知れない。人間社会は、極端に脳が発達したホモサピエンスの集団であり、異なる意見・行動があるのが当然の社会では、お互いの挨拶の励行は大切な要素と考えたい。

挨拶とは多少違うかも知れないが、医療人としては、例えば末期がん患者が「痛い」と言っている場合、まず「そう、痛いんだよね」と言える共感のこころを持ちたいものである。

以上、とりとめも無い新春の挨拶になりましたが、多少とも共感して戴ければ幸いです。

挨拶に心掛けましょう。

1)小川徳雄、長坂鉄夫:医学用語。その批判的脱構築 診断と治療社 2006

臨床研修センター長
小林 茂昭